

この苦しみは何のために

待降節第一主日を迎えました。今年もきれいに整えられた講壇のクランツとポインセチアをご覧になって、ああ、アドベントの季節を迎えられたなあと感慨深い方もおられるのではないかと思います。かくいうわたしもその一人です。この時期は教会暦により、毎週、聖書日課が決まっています、ここ数年はアドベントに入りますと、それまで読んでいた箇所を中断して、この季節ならではの聖書日課の指定する聖句から御言葉を取り次いでおりました。待降節第一週は「主の来臨の希望」、第二週が「旧約における神の言葉」、第三週が「先駆者」、第4週が「告知」、そして25日が「キリストの降誕」となっています。しかし、今年は、教会暦によらずに、続けて読んでいるペテロの手紙から御言葉に聴くことを選びました。クリスマスシーズンは、やはり福音書から、キリストの降誕にまつわるメッセージを聴きたいという声も聞こえてくるような気がします、そもそも旧約聖書39巻、新約聖書27巻、あわせて66巻からなる聖書は、そのすべてが、イエスがキリストであることを証言し、指し示すものですから、どの聖書箇所からも、ペテロの手紙からもキリストを指し示すことがもちろん出来るのです。ですから、待降節、アドベント、それは「到来」「再臨」という意味の言葉です。ここからわたしたちは、主が来られるという光のもとでペテロの手紙をご一緒に読んでゆきたいと願っているのです。

さてそれで今朝の聖書箇所もまことに味わい深いというか、キリストがこの世界に来られた意味をまさに指し示している箇所だと、みなさまもお気づきになったと思います。

「キリストも、罪のためにただ一度、苦しまりました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しまれたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです」。この箇所にわたくしは、「この苦しみは何のため

めに」という説教題をつけました。苦難の僕、十字架のキリスト、この「苦しみ」こそ、十字架の宗教であるキリスト教の本質であります。今日の聖書箇所は、実はこのあと4章に入っても繰り返されますので、説教時間を限っていることもあり、今朝は「苦しみ」ということに絞って御言葉に聴きたい。それは、わたしたちにとって「苦しみ」こそが、わたしたち一人ひとりに深く根ざし、個人を特徴づけ、人と人を繋げると同時に、逆に遠ざけるものでもあると思わされからです。若くて、時間のあるときには、あまりそういうことが実感をもって迫ってこなかったのですが、生病老死、生きること、病むこと、老いること、死ぬこと、そうしたことが還暦をすぎて、わたくしもゆずりも身に迫ってきました。九州にいる米寿をすぎた老親を思うにつけ、また自分自身もお医者さん通いが通常となるなかで終わりも見えてくる。さらに今生かされている2022年のこの社会がコロナ、ウクライナ、環境問題等々、さまざまな課題を抱えている。先日、80億を超えた人類がこのあとどう生きて行くのか、自分たちの子どもや孫の世代はどうなるのか。教育の現場にも携わることを許されて、キリスト教主義教育の可能性はどこにあるのかなど、残された時間のなかでどういう関わり方が出来るのか考えさせられています。わたくしは世代の課題を担って歩むという言い方をよくいたします。ここしばらくの半田教会週報の感話で語られたことを思い起こしても、子どもを身ごもって備えている方の不安と喜びがあるかと思えば、子どもを先に送ることが羨ましがられるような親の誰にも理解されないような痛みと苦しみ、声にならない思い。愛する連れ合いを施設に入れなければならない老夫婦、子どもの葛藤、病の家族を看取る者の哀しみ、看取られる者の思い。それを「苦しみ」と括ってしまえば、わたしたちの周りには心の通わない現実、理解されない苦しみ、不当な支配に苦しまなければならない現実、世界にはミサイルが飛んできて一瞬のうちに瓦礫に変わる町や、飢える者や

乾く者、老いて死を迎えるのではなくて、何らかの理不尽な暴力や災害によって不意に奪われる不条理な死や苦しみが満ちていて、どうして、何故、何のためにと立ちすくむような状況です。

少しわたしは、わたしたちの痛みということ語りすぎたかもしれません。今日の箇所は、そうした現実には苦しむわたしたちにキリスト・イエスが寄り添われたということ語っているからです。ただわたしが申し上げたかったことは、わたしたちは自分の体験する痛みから逃れられず、いつもそこから考え始める。そしてそのために視野が狭くなったり、心が擦り切れ、内向きにたわめられてゆくように思う。しかし、ペテロの手紙が語っていることに聴いていて思わされるのです。十字架のキリストを見上げなさいと、繰り返し招いています。わたしたちの痛みは自業自得と思われるものから、不当だ、不条理だとヨブのように主張したくなるものまでさまざまです。しかし、神は、そのようなわたしたちの痛み悩みを決して放置なさいませんでした。この手紙の受取人たちは、イエスを主と告白して生きることを選んだことで、いや実はこの言い方は聖書的には正確ではなくて、選んだように見えて、実は神によってキリストを告白するものへと召された。彼らは神さまの憐れみによって捉えられてナザレのイエスを、わたしの救い主と告白して救いに入れられたのです。守られたのです。天に接続された。その結果、故郷を追われた。神が、この世を愛して独り子イエスを送られ、この方こそ、メシアであるということを証して生きるものとなることへと召された。そうして彼らはポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ピディニアの各地に砂のように撒き散らされ、ディアスポラのパレピデーモスな人びと＝「離散した仮住まいの選ばれた人びと」になった。それは宗教的難民であり、今でいうならば仮設住宅のようなところに住んで生涯を終えてゆくことであつたかもしれない。しかし、彼らはそのことによってこの地上が仮の宿りであり、天こそが本国であり、こ

の地上における苦しみを神が取り上げてくださり、天に蓄えられている朽ちることも萎むことも汚れることもない資産を受け継ぐものとされるという、この天の消息を、己のものとして生きるチャレンジへと召されたのです。そこでは福音を信じて、キリストの苦しみに与ることが、自分の命と利潤を追求して、この地上で辻褄をあわせて生きようとするわたしたちの生き方に対する裁き、自己実現と自己責任で切って落とすようなこの世界の理に対する、神さまから突きつけられた新しい生き方の可能性として示されている。命を失うための苦しみではなく、永遠の命を得るための苦しみに与っているのだということが、このペテロの手紙から聞こえて来ないでしょうか。

苦しみは、あなたを蝸壺に閉じ込めます。内側に閉ざし、誰にも理解してもらえないと周囲を呪い、みずからを責める。そして人を責める力は自分にも向けられる刃となる。苦しみは家族の問題であったり、生きるために必要な職場での問題であったり、逃れようのないものに思えるからこそ、自分の存在にかかわる実存的な苦しみとしてわたしたちを縛り付ける。わたしは不当に扱われているのではないか。あの人はそうではない。どうして自分はこんな目に合わなければいけないのか。こんな家庭に、こんな身体に、こんな職場に、こんな地域に、国に、この時代に生きねばならないのか。言いたいことは幾らでもあるでしょう。しかし冷静に考えれば、ではわたしだけが特別に扱われなければならない理由を全能者に対してあげることは出来ないことにも気付かされるのです。パウロは、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む。希望は決してわたしたちを欺くことがない。なぜならイエス・キリストを通して、神の愛がわたしたちのうちに注がれているからですとローマの信徒への手紙のなかで述べました。そしてわたしは今日のペテロの手紙の、キリストの苦難について述べた箇所が、ペテロなりにパウロが語った苦難が希望にいたり、その希望がキリスト・イエスにおい

て神の愛に出会う道筋となることにおいて、わたしたちを救いうる神の力なのだ。希望なのだ。苦しみすら強いられた恩寵の手段となる。そのためにキリストの十字架があなたの前に置かれているのだと力強く証ししている。そのためのアドベントであり、クリスマスの出来事なのです。あなたは自分の苦しみにしがみつくのをやめなさい。手放せない子ども時代のぬいぐるみのように自らの苦しみを扱うのをやめなさい。そして十字架を見なさい。わたしの子が、あなたのために、どんな仕打ちを人びとから受けたか、排除され殺されていったか、そのさまをつぶさに見なさい。飼い葉桶に生まれ、底辺の生活から十字架に至る人びとのために自分を与え尽くした消しゴムのような人生のなかに、あなたへの招きがあることを覚えなさい。そうペテロは告げている。

その招きはなんだと思われますか。あなたは自分が神の前に罪人であるということです。イエス様の前に立って、あなたは罪人である自分を受け取りなさいということです。飼い葉桶に降られる幼子の姿を取ってまで、わたしたちの腕のなかに抱きとめられることを願われた神の御心は、あなたは、わたしの子と無縁の生き方をしなくてはならないと仰っておられるのです。わたしの子は、あなたのために苦しむ。あなたに代わって十字架にかかる。それはもはやわたしたちが、自分自身の苦しみに苛まれ、失われるのではなく、神のもとへと導かれるためです。キリストの十字架の苦しみのうちに、わたしのすべての罪が飲み尽くされており、死の問題も復活の御業でその棘は取り去られている。もうこれからあなたは自分の苦しみに殉じた生き方をする必要はない。あなたは贖われた。あなたのうちに、キリストが生きておられる。キリスト・イエスに結ばれて生きることによって、あなたはキリストの体のうちに結び付けられて守られている。これが召されて聖なるものとされて、王の系統をひく祭司の一員として執り成しの生き方を願われているわたしたちの姿な

のです。こうして、わたしたちは聖なるキリストの苦しみに与ることによって、キリストの体のうちに守られ、生きることになる。わたしの外に出て、キリストの内に生きることが、わたしの苦しみから世界を覗くのではなく、キリストの苦しみのなかに入ることで、わたし自身から解放され、神の配慮と導きの内に委ねる平安へと移されてゆく。主の恵みのご支配を信じて生きる神の民、まことの救い主に導かれる羊の群れとなって生きる。それがこの地上を仮の宿りとして生きるわたしたちの姿なのです。

わたしたちはこの礼拝の時間、わたしから離れて、神の子としての時間を生きる。キリストがホストとして、わたしたちをもてなして下さる神の食卓のゲストとして生きる。キリストの苦しみが、わたしたちのための苦しみであり、キリストの死が今を生きるわたしの苦しみばかりか、神を拒んで陰府に降った者たちをも救う驚くべき、まさにアメージングな深さ、広さ、長さ、大きさをもった救いの御業であることを知る。アーメン、ハレルヤと賛美せずにはいられない。この神がキリストにおいて示してくださった救いの御業を、今年も信仰において見つめる待降節第一主日をわたしたちは迎えています。被造物である以上、さまざまな制約と限界を持ったわたしたちはこの世界で呻きながら生きてゆかなければならない。終わりに向けて歩んでゆかねばならない。しかし、わたしたちは暗闇に向けて、虚無に向けて歩んでゆくのではないことを忘れずにいましょう。わたしたちのために、すでに神の祭壇に捧げられた方がおられる。この救い主イエスの福音の内に留まり、わたしたちのために天から低きに降られた神の御業を褒め称え、慰めと励ましを共々に頂いて、それぞれの持ち場へと送り出されたいと願います。

お祈りいたします。